

## ◆地域活動

# オキナワモズク培養種の利用（宮古地区）

宮古農林水産振興センター 田村裕

### 1. 目的

宮古地区では、オキナワモズクのフリー盤状体を用いた種付法の普及が以前から行われているが、環境中に母藻が豊富なこともあり、定着していない。しかし、近年収穫時期の早期化、分散化が求められており、フリー盤状体の重要性は増している。また、狩俣地区ではモズク（糸モズク）の種付けを100%フリー盤状体で行っているが、培養室を持っているのは3経営体のみで、他の生産者は彼らから母藻を分けてもらっており、後継者を育成したいという要望がある。西原、久松、池間地区には、生産部会員が使える培養室が作られている。また、宮古島市は海業センターに生産者が利用できる培養室を整備する予定であり、今後生産者がフリー盤状体を利用しやすくなることが期待される。

そこで、生産者の培養種活用技術向上を目的とし、地域別に指導を行った。

### 2. 活動内容

#### (1) 現状調査

指導に先立ち、地域の現状を調査した。

漁場水深が浅い西原地区と狩俣地区では、8月にシート採苗を開始し、9月に母藻用の網の種付け、沖出しを行い、10月には本養殖用の網の種付けを行う。シート採苗と同時に、越夏法による種付け、あるいは天然母藻の探索が行われる。どの方法が成功するかは年によって異なり、母藻獲得に成功した場合はお互いに融通しあう。越夏法も行われているが、一般的な方法と異なり、滅菌しない海水、洗浄しない母藻を用い、栄養剤を添加せずに、母藻用の採苗を行っている。電気代がかかり、成功率も低いため、あくまで補助的な使用である。

漁場水深のやや深い久松地区、島尻地区、池間地区は、1～2ヶ月遅れで、先行地区から母藻を分けてもらい、いきなり本養殖用の種付けを行う。従って、西原地区、狩俣地区では、寒天培養種に対する意識がおのずと高く、他地区では低い。例えば、狩俣地区のある生産者は、種付けが1ヶ月遅れると水揚げが200万円違ってくる、と話す。

#### (2) 宮古地区用マニュアル作成

八重山地区で作成されたマニュアルを元に、宮古地区の施設の実態に合わせ、技術レベル別に、作業手順を時系列で整理した。

#### モズク種の純粋培養マニュアル

1. 寒天培地から培養液への拡大	.....p.1
1日目 2種類の滅菌海水を作ります	.....p.2
2日目 寒天培地から培養液への拡大	.....p.5
1ヶ月後 培養液からの拡大→種付けまで	.....p.8
2. 寒天培地から新しい寒天培地への移動（中級者）	.....p.9
1日目 器具洗浄・滅菌	.....p.10
2日目 寒天培地を作ります	.....p.14
新しい寒天培地へ植えつけます	.....p.14
3. 寒天培地を利用した種の純粋培養（上級者）	.....p.16

- 雑藻の侵入を防ぐため、海に入ったあとは、体を石けんで洗ってから培養室に入ること
- 作業を行う前には必ずアルコールを手に拭きつけ消毒すること
- 金属、ガラス器具を使用する際、必ず直前に火であぶるか、食器洗剤に2時間入れて滅菌してから使用すること

<問い合わせ先>

宮古農林水産振興センター農林水産整備課漁港水産班水産担当 TEL:0980-72-2365

#### 技術レベル別に時系列で整理されたマニュアル

#### (3) 技術レベル別講習会

初級編：寒天から液体培地への拡大が行える漁業者の育成

中級編：寒天作成、寒天から寒天への植えつけが行える中核漁業者の育成

<平成25年度>

6月25日・中級編・海業センター・11名

8月1日・初級編・久松地区培養施設・3名

8月30日・初級編・西原地区培養施設・11名

<平成26年度>

7月30日・初級編・海業センター・5名

9月30日・経験者技術相談（講師・大城信弘  
北部普及員）・海業センター・7名

### 3. 結果と考察

平成25年の講習会で植え継いだ種は順調に増え、一部の種付けに利用された。平成26年は天然母藻がとれず、ほとんどの漁業者が培養種を利用したため、一気にフリー盤状体の有用性への理解が進んだ。ただし、フリー盤状体の保存に失敗することもあるため、確実に種付けを成功させるためには、地域の実情に即した複数の方法で種付けした方がよいと考える。

今後加工業者から、一層の安定生産、品質向上を求められると予想されることから、低日照や加工に適した品種にも取り組めるよう、定期的に講習を行い、技術向上を図る必要がある。



大城普及員を講師に経験者技術相談



培養講習会中級編



培養講習会初級編(西原地区)